

本日の学び:「回復の預言」 テキスト:エゼキヤ31章27~34節

【理解の手がかりとして】

この 31 章は、イスラエル(ユダ)の復興を語る短い託宣を集めたものである。したがって全体として喜びに満ちた希望のメッセージ集となっている。本課のテキストは 31 章の後半に位置する。まず、その前段(31:1-26)と後段(31:35-40)の内容を押さえておきたい。

- 31:1-6 主の永遠の愛がイスラエル(ユダ)を再建し、契約関係が回復される。その時、民は喜んで労働にいそしみ、収穫し、また神の都シオン巡礼に向かう。
- 31:7-9 イスラエル(ユダ)の残りの者が救われて、帰還するさま。
- 31:10-14 帰還の喜ばしい行進と、神の与える豊かな産物について。
- 31:15-17 子を失って嘆き悲しむラケルに対する神の慰めの言葉。イスラエル(ユダ)の亡国(捕囚経験の悲嘆)を嘆く詩。※ラケルは父祖ヤコブが愛した妻で、ヨセフとベニヤミンを産んだ。ヨセフの子らがマナセとエフライム。「エフライム」はイスラエル 12 部族の中で最も有力な部族の祖。後に「イスラエル」と同義語として用いられる。
- 31:18-20 自らの罪を悔い嘆くエフライムに対して神が切なる憐れみを表白する。
- 31:21-22 イスラエル(ユダ)が親元を飛び出してさまよう〈娘〉として擬人化され、〈立ち帰れ〉との呼びかけがなされる。
- 31:23-26 先行する北イスラエル王国(エフライム)向けの託宣に対して、南ユダ王国の回復を告げる託宣。エルサレムを主が祝福するという内容。
．．．．．
- 31:35-37 神の宇宙創造の秩序が永久であるように、イスラエルに対する神の契約が永久不変であることを告げる。
- 31:38-40 エルサレムの都が復興し、聖別されて、二度と破壊されることはないという約束。

*

さて、ここから本課のテキスト(31:27-34)を詳しく見ていく。

27-28 節では、人口と家畜の数が激減した悲惨な状況から、再び回復への向かう日が来ることが告げられる。かつて主は、破壊しよう(抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらそう)と見張っていたが、こんどは、再建する(建て、また植える)ために見張る。

29-30 節はエゼキエル 18 章と共通の内容。⇒エゼキエル 18:1-4、19-20。捕囚を自分の罪への裁きとして受け止めようとせず、父祖の罪の結果を押し付ける神は正しくないとする人々の誤りをエゼキエルは正し、罪を悔い改めて、生きよと呼び掛けた。

さて、31 節以下、ここにあるのは「新しい契約」の預言である。そこで言われるのは、バビロン捕囚という絶望的な状況に陥ったイスラエル(ユダの民)への神からの一方的な回復である。「一方的」と言うのは、イスラエルにはもはや自力で事態を解決することは全く不可能となっていたからである。

神はまず、イスラエルの罪を指摘する。「わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った」(31:32)と。ここには明らかにイスラエルの側からの契約破棄の事実が告げられている。

聖書信仰は「契約信仰」と言われる。神と人間との契約、そこで交わされたことばへの誠実が、その関係を保持する、という考え方である。神はそのご自身が発せられたことばに対して徹底的に誠実である。しかし一方のイスラエル(人間)はそうあなかった。度々にその契約のことばに不誠実を示し、そして離反したのである。

しかし、にもかかわらず、神はその民を見捨てず、それまでの契約に変わる「新しい契約」を結びと宣言される。31~34 節の各節すべてに「主は言われる」という言葉が繰り返されている。これは、いかにこの「新しい契約」が神の主権の下に結ばれるかを物語っている。

*

では、その「新しさ」とは何か。それは、かつて神が出エジプトの時に結ばれた「古い契約」(律法)とどこか違うのか。それはまず、「古い契約」の時に刻まれたのは「石の板」であったのに対して、来たるべき「新しい契約」は「彼らの心」(胸の中)に刻まれるということ。これは、それまで「…ねばならない」と外側からの強制と感じ取ってきた契約のことばが、今度は心の内側から自発的に、喜びをもって受けとめられ、感謝をもって守られていく、という変化である。

ヤコブの手紙に「自由をもたらす完全な律法」(ヤコブ 1:25)とある。そう、「新しい契約」とは、人間を縛るのではなく解放するものであり、喜びと感謝をもってそのことばに生きていく者へいざなってくれるものである。

「新しい契約」とは、神の側からの「罪の赦し」、そしてそれに感動し、感謝して応答するところに結ばれる。34節に「わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない」とある。ここに旧約聖書の信仰の一つの頂点、そして新約聖書への橋渡しがある。カール・バルトは言う。「人間が神を喪失することはあっても、和解の言葉(イエス・キリストの福音)によれば、神が人間を喪失することはない」と。これは、大いなる慰めである。私たちがたとえ神を見失っても、神は私たちを決して見失われることはない、…ここに救いがある。

『聖書教育』より

- 「私たちも恵みを忘れてしまったことがあるでしょうか。その時の気持ちはどうだったでしょうか。」(大人クラス)